

〔大和文華館の日本工芸展によせて〕

大和文華館蔵「色絵山水花鳥文大皿」 「色絵鷺文深皿」(古九谷様式)の文様をめぐって

緑・黄・紫・青を基本とした濃厚な釉色が特徴的な江戸時代前期の色絵磁器は「古九谷」の名で親しまれています。古九谷は、その文様や色使いの特徴より、「五彩手」「祥瑞手」「青手」の三つに大別されます。五彩手は黒線で文様の輪郭線を象り、鮮やかな上絵具で彩ります。染付は多用されず、圏線や裏面などに用いられます。「祥瑞手」は、中国・景德鎮で明時代末に作られた祥瑞をお手本にしており、五彩手と比べると染付が多く用いられ、上絵具はやや淡い色合いをしています。青手は五彩手と同じく、黒線で輪郭をとりませんが、その大きな特徴は軸彩で全面を塗りつめる点にあります。これら古九谷は、大聖寺藩の九谷窯において作られていたと考えられたことからその名称がありますが、発掘調査や研究が進む中で、有田の初期の色絵磁器である可能性が高まり、近年では「古九谷様式」の呼称も用いられるようになってきています。今後も更なる研究が待たれるところですが、本稿では産地の問題ではなく、五彩手と祥瑞手の文様表現について注目してみたいと思います。

古九谷様式の文様・意匠については、斎藤菊太郎氏・荒川正明氏らの研究があり、五彩手・祥瑞手に描かれる山水人物図が、

中国で明時代末に刊行された『八種画譜』から図様を多く転用していることが明らかにされています。例えば、「色絵松下人物図九角皿」(図1)に描かれる人物三人は、『八種画譜』の『唐詩五言画譜』に載る「春夜」(図2)を参考としています。人物の姿勢・動作は「春夜」図に倣っていますが、背景の水流や橋、家屋は姿を消し、松の下を歩く光景へと変わっています。斎藤氏や荒川氏が指摘するように、画譜の図様をそのまま取り入れるのではなく、人物のポーズなどを参考にしつつも、陶画にしたときに映えるような、簡素且つ詩情ある絵へと改変を加えている点に特徴が見られます。五彩手・祥瑞手に描かれる山水人物図に関しては、具体的な画譜の利用が指摘されていますが、花鳥図に関しては、花と鳥・虫の添わせ方に『八種画譜』からの影響が窺えるものの、山水人物図ほどぴったりと形が合うものが現在のところ見つかっていません。

大和文華館も見込みに花鳥図が描かれた五彩手の「色絵山水花鳥文大皿」(図3)と祥瑞手の「色絵鷺文深皿」(図4)を所蔵していますが、『八種画譜』に共通する形状の鳥や花は見られませんでした。しかし、局部的には『八種画譜』から学んだ表現を認める

ことができます。それは「色絵山水花鳥文大皿」の左下、「色絵鷺文深皿」の右下に描かれる岩上の葉の表現です。まるで岩の上に浮いているかのように描かれる七～八枚が一塊になったこの植物は、五彩手や祥瑞手の作品にたびたび見られるもので、同様の植物が『八種画譜』の山水人物図にも多く描かれています(図2の右下参照)。鳥や花といった主要なモチーフの形は『八種画譜』から取り入れたものではなくとも、岩や葉といった添景の描き方を『八種画譜』から学んでいることが分かります。また、鳥の形に注目すると興味深いのが、同様の鳥が違う作品にも見られることです。例えば、「色絵山水花鳥文大皿」に描かれる二羽の鳥と同じ姿勢の鳥たちが出光美術館所蔵の五彩手の皿(図5)にも描かれています。さらに、鳥の右には同種の果樹が描かれ、鳥のいる地面の表現、葉の茂る岩の配置なども類似しており、同様の絵手本を参考にして描いたと考えられます。しかし、ここでも全く同じに描くのではなく、背景を山と雲にした大和文華館本は雄大な光景となり、背景に蝶を飛ばした出光美術館本は優美な光景となっています。そうした画趣に合わせ、鳥の大きさも微妙に変えられており、大和文華館本では鳥を小さく描くことで空間の広やかさが表現され、出光美術館本では鳥を大きく視点を近く描くことで、身近な愛らしさが表現されているように感じられます。

次に、「色絵鷺文深皿」に描か

れる鷺図と同類のものがいないか探すと、滴水美術館の五彩手の皿(図6)や『日本の文様』28巻(光琳出版社、1977年)に載る五彩手の皿を挙げることができます。鷺(もしくは鷹)はいずれも左を向き、やや前のめりの姿勢をしています。左向きの鷺(鷹)の姿は珍しいものではありませんが、三つの作品の鷺(鷹)は全て嘴を開け、右肩が胸の向こうにわずかにのぞく表現までも同様であり、これらの鷺(鷹)もやはり同じ絵手本に基づいて描かれたと考えられます。ここでも、背景との取り合わせ、色使いなどによって、画趣はかなり異なるものとなっています。絵手本を利用しながらも、主要なモチーフと背景や従文様の組み合わせを工夫することによって、古九谷様式の大きな魅力の一つであるバリエーション豊かな文様・意匠が生み出されていることが窺えます。

(図1・2は『出光美術館紀要』5、1999年、図5は『出光美術館蔵品図録 日本陶磁』出光美術館、1990年、図6は『日本陶磁大系』22、平凡社、1990年から転載しました。宮崎もも)

図 5



図 6

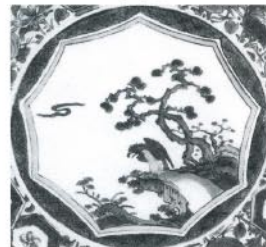


図 2



図 3



図 4



図 1



図1.色絵松下人物図九角皿 見込み部分(大英博物館蔵) 図2.『唐詩五言画譜』春夜図 図3.色絵山水花鳥文大皿 見込み部分(大和文華館蔵)

図4.色絵鷺文深皿 見込み部分(大和文華館蔵) 図5.色絵花鳥図輪花皿 見込み部分(出光美術館蔵) 図6.色絵山水文角皿 見込み部分(滴水美術館蔵)

季刊 美のたより No.173

平成23年1月6日

発行 大和文華館